

# オラリオの絵描き

ナギ丸

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

【フレイヤ・ファミリア】に入った絵描きの物語。その男は世界をどう変えるのか。

# 目次

第1話

第2話

1

5



## 第1話

薄暗い工房に筆が走る音だけが響く。絵を描き終え、筆を置き、背伸びをする。

「ふう〜。」

長い溜息が出る。なかなかの作品が出来て、達成感と心地よい疲労が混ざって気持ちいい。主神に見せるか。そう思い、支度をする。

迷宮都市オラリオ。世界と中心と呼ばれる場所。俺はそこで画家をしている。ここでは神のファミリアに入り、「神の恩恵」を与えられ、モンスターを倒して魔石などを得る冒険者が人気だが、それ以外の人間もたくさんいる。ギルド職員もそうだし、商人や酒屋、宿屋などその種類は多岐にわたる。だから、画家というのもそこまで珍しくないのだが俺のようにファミリアに入っている画家はそういない。そう、俺は画家でありながら冒険者であると言う二足の草鞋を履く男なのだ。周りからは散々変わり者呼ばわりされているが、もちろんこれには理由がある。

子供の頃から絵が好きだった。身寄りが無く、預けられた孤児院の壁によく落書きして大人に怒られた。孤児院を出ると、絵でなんとか小銭を稼ぎ、その日暮らしをしていた。売れない画家と言うやつだ。このままではいけないと故郷を飛び出し、オラリオ

に向かった。

道中、身ぐるみ剥がされたり、奴隷落ちなりかけたりしながら、何とかオラリオに着いた。多種多様な種族、見たこともない物、たくさんの神。自分の世界はなんて小さいものだったのかと感動に打ち震えた。その感動を全財産はたいて買った画材で描いた。馬鹿だとは思いますが、それまでの人生で一番良く描けた。もうこれが売れなかつたら、終わりだなくと思いつながら、市場に座り込んだ。市場と言つても店と店の間の小さな路地だ。左右の店主にお願いして、居座らせた貰つた。絵は、今見ると安い画材と衝動に任せて描いたものなのでとても見れたものじゃない。しかも、誰も気づかないような場所で売っているのだから、当然売れなかつた。疲労と空腹が蝕んでいくのが分かつた。ふと、暗くなつた。顔を上げて見ると大男がいた。まだ若いが正に戦士と言つた風貌であつた。

「いくらだ？」

男が自分の絵の金額を聞いていると理解するまで時間が掛かつた。もう撤収しようかと思ひ始めていたからとても嬉しかつた。

「あんたが決めてくれ。」

だから、その男に任せることにした。今なら自分の絵は誇りを持つて人に値段を決めさせるようなことはするとか、もう一ヴァリスも無いのだからそんなことやめるとか

思うが、その時は任せて見たくなった。この男が決めたのならば俺も満足できる。何故かそう思った。

男は、ズボンから袋を取り出し俺に投げた。

「また来る。」

そう言い残し、去っていった。袋を覗くとそこには大金が入っていた。既に第三級冒険者であった彼にはそれほどであったかもしれないが当時の俺にはとつてもびつくりした。その金で生活できるようになり、絵を描き、それをまた男に売った。余り絵なんて興味がないうような見た目をしていたが、男は定期的に買って行った。男が俺が居る市場に来るのは大体絵を買いに来た時なので、目立つ彼が来ればすぐに行き、絵を売った。段々と余裕が出来てきて、少しずつオラリオについて知っていくと男が有名ファミリアに所属していることを知った。ダンジョンが危険と言うことは知っていたので、男に護衛を紹介して貰えないかと頼んだ。ギルドに頼んだときは危険だという理由で断られたからだ。男は自分も用があったと言いついてこいと言った。そして、俺は彼の主神と出会った。その神は美しく妖しい色気があり、男であれば逆らえない。そう本能で分かった。

その神は

「自分で潜ればいいじゃない。」

と囁いた。自分には冒険者は無理であるのと、自分を入れるようなファミアリアはどこにもないと返した。

「私のファミアリアに入りなさい。」

そう言われて拒否の言葉を言える男はいないだろう。そうして俺は冒険者になった。

摩天楼施設『バベル』迷宮都市オラリオの中心にそびえ立つ塔の最上階。そこは、頂点に君臨する「ファミアリア」の主神の特権だ。その部屋の扉をノックする。

「失礼します。フレイヤ様、お久しぶりです。」

俺、レイ・マスタングの主神様はフレイヤ様であり、俺は「フレイヤ・ファミアリア」の副団長である。



## 第2話

俺は弱い。

常日頃からフレイヤ様のために切磋琢磨している彼らは俺なんかよりずっと強い。そもそも、俺は魔法使いなのだから、最強に、最速、最高の連携、そして魔法剣士。魔法剣士なんて完全に上位互換では!?

では何故俺が副団長なのか。それはフレイヤファミリアの特性によるものだ。フレイヤファミリアは主神フレイヤに絶対の忠誠を誓う。そして、求めるのは彼女の寵愛のみ。では、他の眷属は?ただの障害である。そんなわけで日々殺し合いと呼んでもいいくらいの競い合いをしている彼らは、基本仲が良くない。むしろ悪い。その原因であるフレイヤ様が持つカリスマでファミリアはトップにいるのだから、世の中不思議なものである。

極めた個の集まり「フレイヤ・ファミリア」とは対と言われるのは優秀な幹部たちが率いる組織「ロキ・ファミリア」である。うちもあれぐらい仲良ければ、ありえないな。うん。考えるだけ無駄だな。

そんなうちのファミリアだが平常時、ある程度のみとわりが必要なのである。フレイ

ヤ様が一声かければ怖いくらいまとまりがあるのに、いつもは全くないのである。まあ、まとまりある時もギスギスしてはいるが。そして、幹部はLv. 7、Lv. 6の化け物ぞろい。そんなところにまとめ役として抜擢されたのが、俺と言うことである。

うん、全く嬉しくない。

何故、俺が副団長かフレイヤ様に何度も聞いたが、

「ふいふい、」

と可憐に微笑むだけで答えてはくれない。つまり、俺も何で自分が副団長かよくわかってはいないのだ。

殺し合いと言う切磋琢磨をしている連中なので、団員も慣れていてそこまで深刻な事にはあまりならない。と言うことでいつもは工房で絵を描いたり、モデル探しにダンジョンへ潜ったりしている。今日はダンジョンへ行こうかな、と思っていると、

「「「ダンジョンか？ マスタング」」」

後ろから同じ声で四人分聞こえる。

「やあ、アルフリッグ、ドヴァリン、ベーリング、グレル。元気かい？」

「「「ああ、」」」

この四人兄弟は「炎金の四戦士」Lv. 5、そして小人族でありながら迷宮随一と呼ばれる連携で種族差を覆す強者である。

「『ダンジョンへ行くなら、一緒に来い。』」

これ同意を求めているやつじゃないな。まあ、行こうと思つていたから、構わないか。何故か、他の団員もそうだが、基本的に幹部同士はこう気軽にダンジョンに誘わないのが普通なのに、俺がダンジョンに行くときは大体誰かと一緒に行く。懐かれてる？うん、ありえないしなく。俺の魔法がサポート向けだからか？分からん。

詠唱を終え、魔法を発動する。

【花の唄】

かけ終えた瞬間に四兄弟が飛び出し、モンスターを肉薄する。

「進むか？」

長男であるアルフリッグが聞いてくる。

「そうだね、進むうか。」

ここらの階層で描きたいモンスターはもう大分前に書いてしまったから、強化種などを期待していたがなかなか出会えない。俺は風景、人、冒険者、モンスター、ダンジョンと何でも書くが、なかなかいいモデルと言うのは見つからない。昔、ダンジョンで探しまくって、危うく死にかけた。そこまで、夢中になつてしまうほどダンジョンという迷宮は美しかった。恐ろしさもあつたがそこでしか見れない風景、見たこともないモンスターたち、それに立ち向かう冒険者たち。もう、それを見たら冒険者をやめられなく

なっていた。いがみ合ってはいるが、己の研鑽に余念がない彼らは仲間としては頼もしく、絵に没頭することを誰もケチをつけず好き勝手にやらせてくれるフレイヤ様たちはありがたく、なんだかんだ自分にはこのフアミリアがあつていと思う。

レイ・マスタング。「フレイヤ・フアミリア」所属。Lv. 5。彼も第一級冒険者であるが、他の幹部に比べると見劣りする。

では、何故、彼が副団長で、いがみ合うハズの団員の中で例外扱いされているか。

まず、単純な理由としてレイが強いと言うことにある。この場合の強いは戦闘力と言うよりは、合わせる力の事である。レイの魔法の一つは「花の唄」といい対象者のステータス強化する魔法である。なんとこれは、全ステータスを強化し、8〜10人くらいまでなら安定して同時にかけることができる。魔法による援護やサポートもうまい。これだけなら、いざというとき足手まといになる危険性もあるものだが、魔法に大抵のあいてなら回避ができる俊敏性と技量など一人でも戦えるくらいには強い。なので、一緒に行けばただ攻略が楽になる。デメリットはなし。他の幹部と違い、一緒にいてもギスギスはしない。これがよく誘われる理由である。ちなみに、レイが持つ魔法が技量がないと弱く使いこなすのに時間がかかったのが、彼がまだLv. 5の理由の一つでもある。ちなみにもう一つはしよっちゅう冒険で見たものを描くことに没頭し、冒険に行かないことがLv. 5の原因と冗談交じりで言われたいる。

副団長である理由は、オツタルが団長であるのは、力量的に仕方ない。だが、他のやつには負けない。幹部はそういうプライドがあるため、みんなが取り合う護衛の任を手く調整したりしてくれるレイが副団長の方がまだ良い、とのことである。そんなわけでフレイヤはレイを副団長に任命したときも不平不満は余りでなかつた。フレイヤの決めたことにケチをつけるものはいつものことだが、10日ほど絵に没頭して自分の飯も食べ忘れることがある絵描きバカには男としての対抗心はそこまで刺激されないようだ。

なんだかんだ、自分の好きなことに没頭し、ギスギスした空気が流れるファミリアの中で清涼剤と緩衝材の役割を果たす彼は団員からは好かれているのである。が、そんなことは恥ずかしくて言えないし、フレイヤ様にすっかり寵愛貰ってたりするので、レイにはこの事実が伝わらない。